

ISSN 2187-0691

Japanese Journal of Maritime Activity

Vol.10 No.2

第10卷 第2号

海洋人間学雑誌

January 2022

令和4年1月



日本海洋人間学会

Japan Society for Maritime Activity

目 次

原著論文

- 海での自然体験活動がライフスキル獲得に及ぼす影響についての質的調査
－指導者の視点から見た探索的研究－ 15
千足耕一，蓬郷尚代，松本秀夫.

研究資料

- 国立公園指定によるスポーツ・レクリエーション活動参加への影響
－慶良間諸島国立公園におけるスubaダイビングを例とした調査－ 24
大下和茂，小泉和史.

編集後記/30

□原著論文□

海での自然体験活動がライフスキル獲得に及ぼす影響についての質的調査 —指導者の視点から見た探索的研究—

千足耕一¹, 蓬郷尚代¹, 松本秀夫².

¹東京海洋大学; ²東海大学.

海洋人間学雑誌, 10(2):15-23, 2022.

(受付: 2020年4月22日; 最終稿受理: 2021年8月10日)

【抄録】

本研究は、指導者の視点から、海での自然体験がライフスキル獲得に及ぼす影響を探索するとともに、ライフスキル獲得に影響を与える概念を生成し、それら概念間の関係を明らかにすることを目的として、指導者13名を対象とした聞き取り調査を行った。得られたデータからヴァリエーションを抽出し、それらを具体例とする13個の概念、概念間の関係から5個のカテゴリー、カテゴリー相互の関係からストーリーラインを作成した。海での自然体験においては、【水辺や海が持つ特性への反応・対応】に含まれる感情、反応、対応が生じることが示された。また、【活動中に生じる状況へ対応する体験】から刺激を受け、【自己価値の発見】【共感・受容】といった変容が生じるとともに、【主体意識や新しい見方の獲得】が示す成長につながるストーリーラインを示した。生成された13個の概念と5個のカテゴリーは、参加者のライフスキル獲得に影響していることが示唆された。

キーワード: 海, 自然体験活動, ライフスキル, 指導者, 質的調査.

I. 目的

世界保健機関(WHO)は、ライフスキルについて、日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力として定義し、身体的、精神的、社会的健康を増進する上で重要な役割を果たしている社会心理的能力としてのライフスキルに関する教育を促進する必要があると示している¹⁾。

上野は、公衆衛生学及びコミュニティ心理学から始まり体育・スポーツ心理学領域に至る小学生から大学生を研究対象者としたライフスキル研究についてレビューし、ライフスキルは学習によって獲得可能な能力とされ、その学習過程は、教示、モデリング、フィードバックなどの方法を用いる社会学習理論によって説明されると記述している。また、日常生活に対する不適応行動などを、学習を通じて克服することが可能であるとする考え方を示している²⁾。日常生活場面で必要とされるライフスキルは、21世紀の日本における教育の基本目標である「生きる力」に極めて類似した概念として位置づけられ、人としての成長を促す能力としても理解できると考えられている³⁾。

本研究は、学習を通じて獲得されるライフスキルへの影響を海での自然体験活動に着目して探索的に検討しようとするものである。自然体験活動とは、「自然の中で自然を活用して行われる各種活動であり、野外活

動、自然・環境学習活動、文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動」と定義されている。なお、自然体験活動の類似概念として「野外教育」「水辺活動」「海洋性スポーツ」などがある。野外教育は「自然の中で組織的、計画的に一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」と捉えられ、「野外教育は自然体験活動を取り扱う教育領域である」と位置付けられている⁴⁾。吉田は学習指導要領に示されている「水辺活動」という用語は、広義には水辺環境を利用して行われる仲間や自然などの要素を大切に捉える総合的な野外活動と述べ、海洋性スポーツについて、特殊な用具を用いずに主に身体的資源の下に行われる「第一次的活動」、専門的用具・器具を使いこなす事によって行われる「第二次的活動」、動力を用いる「第三次的活動」に整理している⁵⁾。本研究の対象とする海での自然体験活動とは、海や海辺、自然の水中や水上といった水圏環境で行われる、吉田の述べた第二次的活動までの（動力を用いる活動は含まない）範囲における自然体験活動を指すこととする。なお、自然体験活動については、事前準備から事後の学習に至る一連の活動として捉え、海辺での生活体験も含むものと考えることとする。

これまでの先行研究においても、海での自然体験活動とライフスキル獲得との関係が検討してきた。太子は長距離歩行とセーリングを用いた野外体験型新人社員研修プログラムの参加者18名を対象として、24項目から構成される日常生活スキル尺度大学生版を用いた調査を実施し、セーリングセクションにおける対人スキルと対人スキルの下位尺度であるリーダーシップと対人マナーや、個人的スキルの計画性に有意な向上

責任著者: 千足耕一

〒108-8477 東京都港区港南4-5-7

東京海洋大学5号館108研究室

e-mail: chiashi@chiashi.jp

が認められたことを報告している⁶⁾。また、野口らは、大学が実施した4泊5日の集中授業であるアウトドアレクリエーションの受講者28名を対象として、島本らが開発したライフスキル評価尺度と振り返りシートを用いてライフスキルの変容を調査した結果、大学の授業(実習)を通して参加者にライフスキル向上が認められ、非日常の中での様々なストレスに向き合い、達成することや、それを振り返り言語化することがライフスキルの獲得に寄与する可能性を示唆している⁷⁾。

海での自然体験活動におけるライフスキルの向上を検討した蓬郷らは、海辺でキャンプ生活を行なながらシーカヤックやスキンダイビングを中心とした自然体験活動を主なプログラムとする3泊4日の大学正課集中授業参加者の感想文を質的に分析し、辛い体験や限界を超える体験、変化する状況に対応する体験、他人を思いやり気遣う体験などの概念を抽出し、自然豊かな非日常環境において、適切な人数で、適切な支援環境のもとに、目標に向かって挑戦して達成する経験が大学生のライフスキル獲得・向上に影響している可能性を示唆している⁸⁾。

ライフスキルは、日本の21世紀における教育の基本目標に示される「生きる力」に極めて類似した概念として位置づけられているが、野外教育の分野では、1996年の中央教育審議会答申に示された「生きる力」に着目して、橋ら⁹⁾が開発したIKR評定用紙を用いた量的な調査研究が重ねられてきた。橋らがキャンプ場面での「生きる力」を測定するために開発した「IKR評定用紙」は、1.非依存 2.積極性 3.明朗性 4.交友・協調 5.現実肯定 6.視野・判断 7.適応行動 8.自己規制 9.自然への関心 10.まじめ勤勉 11.思いやり 12.日常的行動力 13.身体的耐性 14.野外技能・生活といった14の下位尺度と「心理的・社会的能力」「德育的能力」「身体的能力」の3つの上位尺度で構成されている。このIKR評定用紙を用いて、矢野は、臨海学舎に参加した児童317名を対象として、遠泳活動を含んだ集団宿泊事業の前後および1か月半後に参加児童の生きる力の変容を調査し、事業前後において生きる力が向上し、1か月半後まで影響が維持されたと述べている¹⁰⁾。また、青木らは、海洋スポーツ、環境教育、安全教育、生活・文化体験を含んだ日本版ウォーターワイズプログラムに参加した児童267名を対象として、事業の前後で14因子から構成される生きる力の変容を調査した結果、身体的耐性を除く13因子において有意な得点の向上が認められ、3泊4日の短期間であっても十分な効果が得られたことを報告している¹¹⁾。

この他、諫山は冬季宿泊研修プログラムに参加した64名と海洋研修プログラム(子どもの船)に参加した34名の計98名の児童を対象として、事業前後での自己概念について検討した結果、冒険的プログラムとレクリエーション的活動といったプログラムの違いが、自己概念に与える効果の相違に関連していると述べている¹²⁾。

布野らは、前述のような一過性で短期間のプログラム前後の変容を比較するだけでは十分ではないことを指摘したうえで、長期的なセーリング体験が児童の心理的変容および行動変容に及ぼす影響について、5名の指導者を対象とした質的な分析から仮説モデルを設定したうえで133名の中学生を対象に量的な調査を実施

して仮説モデルの検証を行っている。セーリングに含まれる「環境刺激体験」「操船体験」「操船不能体験」「レース体験」が「メタ認知」「自己評価の高まり」「共感性」といった心理的な変容を介して「自主的な行動」「協力行動」「技術の向上」といった行動変容に影響を及ぼす可能性を示唆した¹³⁾。

山川は、自然体験活動が参加者の「生きる力」に与える影響について、33件の研究成果についてのメタ分析を行い、自然体験活動が全般として「生きる力」の育成に有効であること、短期間の自然体験活動よりも中期および長期での自然体験活動では「生きる力」「心理的・社会的能力」の効果量が2倍以上であったことを報告している。また、単にプログラム期間を長くすれば良いということではなく、自己・他者・自然との多様な関わりを持ち、その体験を振り返る機会を持つプログラムづくりの必要性を示唆するとともに、活動中の行動変容メカニズムを実証的に明らかにする必要があると述べている¹⁴⁾。

これらの「生きる力」や「ライフスキル」、「自己概念」などの変容を取り扱った研究は、その多くが自然体験活動プログラムの前後において質問紙を用いる量的な研究であり、それぞれのプログラムに含まれる体験の内容や質あるいは参加者における変容の要因を精査したもののは少ない。参加者の社会心理的能力の変容に、どのような体験や刺激が影響を及ぼしたかを検討するためには、聞き取り調査や参与観察などの研究方法を導入することが望まれる。海での自然体験活動に含まれる体験や要素がどのようにライフスキル獲得に影響を及ぼすかについては、蓬郷ら⁸⁾によって参加者の感想文を材料とした分析が実施されているが、指導者の視点からの研究は見られない。指導者から見た海での自然体験活動によるライフスキルの獲得へ及ぼす影響を検討することは、海での自然体験活動を提供する者が参加者の成長プロセスや枠組みを認識して、より効果的なプログラムの開発を可能にすることに貢献する意義を有すると考えられる。そこで、本研究では、指導者の視点から、海での自然体験がライフスキル獲得に与える影響を探索的に明らかにするため、海での自然体験活動における指導者を対象に聞き取り調査を実施することにより、海での自然体験活動に関わるデータから概念を生成し、それら概念間の関係を考察することを目的とする。

II. 方 法

1. 調査方法

本調査では、指導者の視点から、海での自然体験がライフスキル獲得に与える影響を探索的に明らかにすることを目指して、海での自然体験活動に関わるデータから概念を生成し、それら概念間の関係(カテゴリー)を追究するために、探索的なアプローチによる聞き取り調査を行った。なお、本研究で示している概念とは、海での自然体験により生じる「体験」や「感情」もしくは「成長・変化」であり、それらを整理したものである。また、カテゴリーとは概念を意味やプロセスで関係づけを行ったものである。

A. 調査対象

調査対象者は、海での自然体験活動の指導者を対象とした指導経験を有する13名(男性12名、女性1名)

平均経験年数 23.7 年; 表 1) である。データの収集と分析を交互に行いながらデータと分析結果が最適関係となるところを理論的飽和化の判断基準として、対象者数が 13 名のところまでデータ収集を行った。最初の 12 件のインタビューでほとんど飽和化が起こると記載される文献¹⁵⁾に依拠するとともに、野外教育研究の分野において M-GTA を援用した質的研究において、不登校中学生を扱った研究では 18 名¹⁶⁾、スクーバダイビングの長期愛好者を対象とした研究では 19 名¹⁷⁾、野外教育プログラム参加者の保護者を対象とした研究では 12 名を分析対象としており¹⁸⁾、それぞれ段階的にデータを収集し、概念から結果図の作成過程で重要な部分が抜け落ちていないかを検討することによって理論的飽和化の判断が行われていたことを参考とした。

表 1. 対象者の属性

対象者	性別	年齢	経験種目	経験年数
1	男	60歳以上	シーカヤック	30年
2	男	40-49歳	シーカヤック	20年
3	女	20-29歳	航海カヌー	10年
4	男	40-49歳	海洋活動全般	20年
5	男	40-49歳	シーカヤック	24年
6	男	40-49歳	シーカヤック・ダイビング	17年
7	男	40-49歳	ダイビング	23年
8	男	50-59歳	海洋活動全般	34年
9	男	50-59歳	海洋活動全般	40年
10	男	50-59歳	シーカヤック	30年
11	男	20-29歳	セーリング	15年
12	男	30-39歳	アウトリガーカヌー	15年
13	男	60歳以上	シーカヤック	30年

B. 調査実施時期・場所、所要時間

聞き取り調査は、2015 年 6 月～2017 年 3 月に、T 都、C 県、K 県、O 県および T 県の研究施設や事務所等において行い、対象者の負担にならないように配慮した。所要時間は 20～40 分であった。

C. 調査の手順および倫理的配慮

聞き取り調査に際しては、研究の趣旨および研究参加についての説明を行ったのち、IC レコーダによる録音およびフィールドノーツをとることの同意を求め、全員が同意した。

D. 調査項目

聞き取り調査では、ライフスキルの内容を把握してもらうために、WHO¹⁹⁾が提示したライフスキルの 10 項目 ([LS1 : 意志決定][LS2 : 問題解決][LS3 : 創造的思考][LS4 : 批判的思考] [LS5 : 効果的コミュニケーション] [LS6 : 対人関係スキル] [LS7 : 自己意識] [LS8 : 共感性] [LS9 : 情動への対処] [LS10 : ストレスへの対処]) に関する説明文 (表 2) に目を通してもらったのち、あらかじめ用意した 2 つの基幹質問項目、「海での自然体験活動が参加者のライフスキル獲得に影響を及ぼすか」、「ライフスキルを獲得・向上させるためにはどのような体験をする(させる)と効果的か」を設定し、発話を求めた。また、答えが「はい、いいえ」となることを避け、オープン・エンドの質問が主となるようにした。

表 2. ライフスキルの 10 項目についての説明文

ライフスキル (LS) の項目	説明文の内容
LS1 意志決定	生活に関する決定を建設的に行うための助けとなる。
LS2 問題解決	日常の問題を建設的に処理することを可能にする。
LS3 創造的思考	どんな選択肢があるか、行動あるいは行動しないことがもたらすさまざまな結果について考えることを可能とし、意志決定と問題解決を助ける。
LS4 批判的思考	情報や経験を客観的に分析する能力である。
LS5 効果的コミュニケーション	私たちの文化や状況にあったやり方で、言語的にまたは非言語的に自分を表現する能力である。
LS6 対人関係スキル	好みのやり方で人と接触することができる。
LS7 自己意識	自分自身、自分の性格、自分の長所と弱点、したいことや嫌いなことを知ることである。
LS8 共感性 (共感する能力)	自分が良く知らない状況におかれている人の生き方であっても、それを心に描くことができる能力のことである。
LS9 情動への対処 (感情を制御する能力)	自分や他者の情動を認識し、情動が行動にどのように影響するかを知り、情動に適切に対処する能力のことである。
LS10 ストレスへの対処	生活上のストレス源を認識し、ストレスの影響を知り、ストレスのレベルをコントロールすることである。

2. 分析方法

A. 概念とカテゴリーの生成

本研究では、聞き取り調査で得たデータをテクスト化して得られた 1 名あたり 800 字～3500 字 (平均 2120 字) の逐語データについて、データ提供者に共通した特性を理論化する手法¹⁶⁾である木下¹⁹⁾の修正版グラウンド・セオリー・アプローチ (Modified-Grounded Theory Approach : 以下 M-GTA) を援用した。IC レコーダに録音された面接内容をテクスト化した逐語録 (テクストデータ) について、文脈を重視して、分析作業において分析ワークシートを作成した。分析ワークシートには、概念名、定義、具体例 (ヴァリエーション)、理論的メモを記入した。分析テーマとして、海での自然体験により生じる「体験」や「感情」もしくは「成長・変化」を設定した上で、そのテーマに照らして、データからヴァリエーションを抽出し、それらを具体例とする概念を生成した。また、概念間の関係であるカテゴリーの作成を行い、カテゴリー相互の関係について結果図とストーリーラインを作成した。

B. 第三者によるトライアンギュレーション

分析については、第一著者が主導にて分析ワークシートを作成した。質的データの解釈に関する妥当性を担保するために、海洋スポーツおよび野外教育を専門とする研究者 2 名をmajied えたトライアンギュレーションを実施した。

III. 結果と考察

1. ライフスキル獲得に影響を与える<概念>および概念間の関係から生成された【カテゴリー】

発話データを分析した結果および概念の生成、概念間の関係からカテゴリーが生成される過程について以下に示す。文中の「」はデータからの抜粋、<>は概念、【】はカテゴリーを示す。概念を生成する過程で作成した分析ワークシートの一例を表 3 に、概念間の関係から生成されるカテゴリーの生成過程については、その一例を表 4 に示した。

A. 水辺や海を持つ特性への反応・対応

海での自然体験の特性として、「海の広がりと繋がりを感じることが出来る」「想像していなかった世界が見えるところのインパクトが大きい」「未知との出逢い」「圧倒的な面白さ」「自然に対する興味がどんどん広がっていく」「知的好奇心の充足」「日常生活のストレスか

表3. 分析ワークシートの一例

概念名	必然的なコミュニケーション体験
定義	活動形態に内在する（求められる）必然的なコミュニケーション
ヴァリエーション	<p>（例1）一旦海に出てしまえば、船の中だけが自分たちのコミュニケーションの世界であるということが、陸に上がるまで自分たちで何とかしなければいけないという力を養う。</p> <p>（例2）小さい船の集まりなら、皆が船長で、それらの経験を集めるならコミュニケーションが必要になる。コミュニケーション能力がないと集団にはなれない。コミュニケーションを取るために言葉を持っていることが重要である。</p> <p>（例3）自分に必要なところは自分から話しかけていくというようなところで、効果的コミュニケーション獲得に役立つのではないか。</p> <p>（例4）実際場面において2人で組んだ時に、コミュニケーションについて学べるのかなと思う。</p> <p>（例5）仲間と生活を共有することで、コミュニケーションを助長する効果はあるかなと思う。</p> <p>（例6）6人乗りのカヌーはコミュニケーションが大切で、必要です。陸に上がってから話をすることも対人関係スキルに関係してくるように思います。</p> <p>（例7）目標があると、コミュニケーションとか対人関係は濃くなっています。</p> <p>（例8）利用している海岸にゴミが流れ寄ってきて、それをみんなで片付けるのですが、そういうことを通じてコミュニケーションが向こうしたりします。</p> <p>（例9）10人で合宿生活みたいなものをやって、レースに出て帰ってくるんですが、一緒にいる時間が長いほど、コミュニケーションも良くなります。</p>
対比例	<p>理論的メモ</p> <ul style="list-style-type: none"> 閉じられた空間で発生するコミュニケーションがあるのではないか。 働きかけなければならぬ必然性によってコミュニケーション能力を伸長させる可能性があるのではないか。 安全に実施しようとか、何かを目標にしようとする際にコミュニケーションが求められる。 <p>（例1）効果的コミュニケーションという点では、言われなければ受け身な子が多いです。</p> <p>（例2）対人関係スキルが低い人は、大人が6人乗っているんですけど、ひどい場合になると、あいつとは一緒に乗りたくないというようになってしまいます。人のことを色々とうメンバーもいます。</p> <p>（例3）レースが終わると、8割くらいは対人関係が良くなっていますが、悪くなっているパターンもあります。</p> <p>（例4）組み合わせを間違えると2人とも全くカヤックを漕がなくなることもあります。問題があつて、全く浮いてしまって、輪の中に入れない人もいますし、それで帰ってからみんなと付き合わなくなる事例があったようです。</p>

表4. ヴァリエーション・概念・カテゴリーの関係
(一部抜粋)

カテゴリー	概念	ヴァリエーション
（海での自然活動中に生じる状況へ対応する体験と解釈）	必然的なコミュニケーション体験	<p>船の中だけが自分たちのコミュニケーションの世界である</p> <p>2人で組んだ時にコミュニケーションについて学ぶ</p> <p>自分に必要なところは自分から話しかけていく</p>
	対応・対処する体験	<p>その時あるものでカヌーの上で過ごす</p> <p>風向きを考慮して行き先を考える</p> <p>外的な環境に対応する</p>
	工夫・試行錯誤する体験	<p>積めるキャパシティが決まっているカヤックに持っていくものを決める</p> <p>船をどう進ませるかイメージする</p> <p>水中でのコミュニケーションについて考える</p>
	挑戦する体験	<p>一歩踏み出して、日常ではない体験をする</p> <p>ゴールを定めてみんなで目指す</p> <p>危険があるけれども自分で決めてやる</p>

らの解放」「原初的な魅力を経験することが可能」といったヴァリエーションが認められた。これらは水辺や海で自然体験を実施することによって参加者が得ることのできる快い感情を示していると考え、<概念①：快感情>を生成した。

一方で、「水は足のつかなくなる瞬間泳ぐとか別の行動が必要になる」「水の中では息ができない」「海というのは水の上だから止まっていられない」「海は波があつたり、流れがあつたりで、変動するものに反応しなければならない」「常に動く中で対応したり働きかけたりしなければならない」などのヴァリエーションが示された。これらは、参加者が海や水の特性（要求）に何とか対応しなければならないこと（必要性）を示していると考え、<概念②：要求と必要性>を生成した。

海での自然体験の実施にあたっては、危険性を考慮して準備したり、対応したりする必要があり、「怖さがベースにある」「海はひとつ間違えればすぐに死んでし

まう」「非常に危険なところ」「失敗が許されないことが多い」「より綿密な、より安全などといった心構えで計画を立てる」「きちんと準備をする」「天気を読んだり」「海況を予測する」「下見を行う」「情報収集する」といったヴァリエーションが示された。これらは、海や水辺での安全性の確保、自分の命を守るために心構えや準備が示されていると考え、<概念③：心構えや準備>を生成した。

<概念①：快感情><概念②：要求と必要性>および<概念③：心構えや準備>は、水辺や海が持つ特性とそれに対する人間の反応や対応を示していると解釈して

【C1：水辺や海が持つ特性への反応・対応】のカテゴリーを生成した。

B. 活動中に生じる状況へ対応する体験

「一旦海に出てしまえば、船の中だけが自分たちのコミュニケーションの世界である」と述べられているような、水面に浮かんだ舟艇等に同乗して、狭い空間で共に行動することや、ダイビングやスノーケリングで用いられるバディ・システムによって「2人で活動することが大切だということについて経験を重ねると理解される」のようなヴァリエーションから、狭い空間や体験を共有する中で他者を意識する機会が生じ、コミュニケーションが必然的に生じることを示していると捉え、<概念④：必然的なコミュニケーション体験>を生成した。

海での自然体験においては、「海が変化し、それが自分の生命につながっている」「危ないなと思ったらやめる」「その時あるものでカヌーの上で過ごす」「置かれた状況をどのように脱出するか」「今日は風が強いからこうしてみよう」「風向きを考慮して行き先を考える」のようなヴァリエーションで示される体験が生じており、変化する環境や状況へ対応・対処する体験が生じることを示していると捉え、<概念⑤：対応・対処する体験>を生成した。

「積めるキャパシティが決まっているカヤックに持っていくものを決める」「船をどう進ませるかイメージする」「途中にチェックポイントを設けておき、時間内に入らなければ戻ってくる」「水中でのコミュニケーションについて考える」「水を作る」「魚を捕る」「火を起こす」などのヴァリエーションは、限られた状況に対して考えて工夫し、試行錯誤する体験を示していると捉え、<概念⑥：工夫・試行錯誤する体験>を生成した。

「一歩踏み出して、日常ではない体験をする」「恐怖心を克服する」「ゴールを定めてみんなで目指す」「危険があるけれども自分で決めてやる」といったヴァリエーションに見られる、一歩踏み出す、克服する、目標を設定する、自分で決めるといった要素を総合して、挑戦することを示すと解釈し、<概念⑦：挑戦する体験>を生成した。

上記のような、<概念④：必然的なコミュニケーション体験><概念⑤：対応・対処する体験><概念⑥：工夫・試行錯誤する体験><概念⑦：挑戦する体験>を海での自然活動中に生じる体験と解釈して、【C2：活動中に生じる状況へ対応する体験】のカテゴリーを生成した。

C. 自己価値の発見

「やっと目的地につける達成感がある」「きちんと準備しておけばクリアできる」「やれば大きくかえってく

る」「夢中でやると欲求とか満足が高くなる」「不安から樂しみに変わる」「漕ぎ切ったということで自信がつく」

「アクシデントを乗り越えると結束力が高まる」「繰り返していったら出来る」などのヴァリエーションから、行動とその結果から得られる達成感や自信の獲得があることを示していると考え、<概念⑧：自信や達成感の獲得>を生成した。

また、「海という自然の中で正直な自分が出てくる」「自然を通して今の自分を正しく評価するようにしている」といったヴァリエーションから、自然の中で活動することを通して正しい自己評価が可能となることを示していると考え、<概念⑨：自然を通した自己評価>を生成した。

<概念⑧：自信や達成感の獲得><概念⑨：自然を通した自己評価>の2つの概念は新たな自己の発見を示していると捉え、【C3：自己価値の発見】のカテゴリーを生成した。

D. 共感・受容

「自然を相手にしていると、受け入れる姿勢が身につく」「一人一人が自分の命を握っている状況になる時もあるので、海の上だとその人を受け入れることでストレスもなくなる」「受け入れるということはありのままを認めるということ」などのヴァリエーションから、自然の状況や共に活動する他者を受け入れることを示す<概念⑩：他者や状況を受け入れる>を生成した。

「すぐに命を落とす状況にいるから極端なことはしない」「恐怖心を克服することによって判断力が身につく」「身をもっていっぱい経験することによって判断力が付くし、判断力の中から察知能力や想像能力が生まれてくる」「ギリギリの経験をして助かっていれば判断を誤らない」「引き返すということを覚え、退く勇気を持てる」といったヴァリエーションは、海での自然体験を通して洞察力や判断力が養成されることを示していると考え、<概念⑪：見極める・あきらめる>を生成した。

<概念⑩：他者や状況を受け入れる><概念⑪：見極める・あきらめる>の2つの概念は、他者の受容、他者との共感、自然や自分の置かれている状況についての受容を示していると捉え、【C4：共感・受容】のカテゴリーを生成した。

E. 主体意識や新しい見方の獲得

「自分たちで何とかしなければならない力を養う」「1つ1つ決定していくないと先には進めないし、1つを決定するうえで周りの状況を見て決定しなくてはならない」「自分でやらないとできない」「海は自分の能力に応じて自由度が無限」「自己責任があり、それが自信につながる」「ついて行っているだけとか、依存ではなくて、自分たちで計画を立てて、自分たちでやる」「自分で考える」「自ら海に出る」といったヴァリエーションは、自分の能力を見極めて自ら行う能力の向上を示していると捉え、<概念⑫：主体性の獲得>を生成した。

また、「リーダーは先導者であり、リーダー経験をすることを考え方が変わる」「リーダーは考えて、決めて解決しないといけない」「リーダーとして、危なかつたり難しかったりする状況でも不安にさせず能力を発揮させる」「リーダーをやると意識が高まる」「リーダー的な存在になる場合にライフスキルの要素が網羅されてくる」のようなヴァリエーションから、リーダー体験に

よる成長が示されていると考え、<概念⑬：リーダーシップの獲得>を生成した。

<概念⑭：主体性の獲得><概念⑮：リーダーシップの獲得>の2つの概念は、主体的に取り組む意識や態度、新しい枠組みで物事を認識したり、周囲と自分を客観的に認識したりすることが可能となるような変化を示していると捉え、【C5：主体意識や新しい見方の獲得】のカテゴリーを生成した。

2. 概念やカテゴリーを交えたライフスキル獲得への影響（表5）

本研究で得られた概念やカテゴリーとライフスキル獲得との関係について考察する。【C1：水辺や海が持つ特性への反応・対応】は、[LS2：問題解決][LS10：ストレスへの対処]といった要素の獲得・向上に関連していると考えられる。例えば、<概念①：快感情>には、「海でストレスを解消します」「海に出て、身体を動かす」ということでストレスをコントロールするなどのヴァリエーションに見られるように[LS10：ストレスへの対処]が関連しており、<概念②：要求と必要性><概念③：心構えや準備>は、「死なないためや怪我をしないため」「できない場合にどうするか」「問題解決という状況はしおっちゅう出てきて、話し合って解決していく」といったヴァリエーションにみられるように[LS2：問題解決]に影響すると考えられる。

【C2：活動中に生じる状況へ対応する体験】は、[LS1：意志決定][LS2：問題解決][LS3：創造的思考][LS4：批判的思考][LS5：効果的コミュニケーション][LS6：対人関係スキル][LS8：共感性][LS9：情動への対処][LS10：ストレスへの対処]といった要素の獲得・向上に関連していると考えられる。<概念④：必然的なコミュニケーション体験>では、他者理解が促進され、「経験を共有することでコミュニケーションを助長する」などのヴァリエーションに示されるように[LS5：効果的コミュニケーション][LS6：対人関係スキル][LS8：共感性]への影響が示唆される。風向きや海の変化などへの対処や

「置かれた状況を脱出する」などのヴァリエーションにみられるようなく<概念⑤：対応・対処する体験>は、[LS2：問題解決][LS9：情動への対処][LS10：ストレスへの対処]に関連していると考えられる。「船の進ませ方を考える」「陸に上がるまで自分たちで何とかしなければいけないという力を養う」などのヴァリエーションに示される<概念⑥：工夫・試行錯誤する体験>は、[LS2：問題解決][LS3：創造的思考][LS4：批判的思考]への影響が考えられ、「一歩踏み出す」といったヴァリエーションで示される<概念⑦：挑戦する体験>は、[LS1：意志決定][LS10：ストレスへの対処]への影響が考えられる。

【C3：自己価値の発見】は、[LS1：意志決定][LS7：自己意識]の獲得や向上と関連していると示唆される。

「やっと目的地につける達成感がある」「きちんと準備しておけばクリアできる」「やれば大きくかえってくる」「漕ぎ切ったということで自信がつく」などのヴァリエーションに表現される<概念⑧：自信や達成感の獲得>は、[LS1：意志決定][LS7：自己意識]に関連していることが考えられる。「自然を通して自分を正しく評価する」と表現される<概念⑨：自然を通した自己評価>は、[LS7：自己意識]に関連していると捉えることが出来る。

表5. 本研究で生成された概念とそれらが影響を及ぼすライフスキルの要素との関連

概念名	定義	LS1: 意志決定	LS2: 問題解決	LS3: 創造的 思考	LS4: 批判的 思考	LS5: 効果的コミュ ニケーション	LS6: 対人関係ス キル	LS7: 自己意識	LS8: 共感性	LS9: 情動への 対処	LS10: ストレスへの 対処
①: 快感情	水辺や海で自然体験を実施することによって参加者が得ることのできる快い感情										○
②: 要求と必要性	参加者が海や水の特性（要求）に何とか対応しなければならないこと（必要性）		○								
③: 心構えや準備	海や水辺での安全性の確保や自分の命を守るために心構えや準備		○								
④: 必然的なコミュニケーション体験	活動形態に内在する（求められる）必然的なコミュニケーション					○	○		○		
⑤: 対応・対処する体験	変化する環境や状況へ対応・対処する体験が生じる		○							○	○
⑥: 工夫・試行錯誤する体験	限られた状況に対して考えて工夫し、試行錯誤する体験		○	○	○						
⑦: 挑戦する体験	一步踏み出す、克服する、目標を設定する、自分で決めるといった要素		○								○
⑧: 自信や達成感の獲得	行動とその結果から得られる達成感や自信の獲得があること	○						○			
⑨: 自然を通した自己評価	自然の中で活動することを通して正しい自己評価が可能となること								○		
⑩: 他者や状況を受け入れる	自然の状況や共に活動する他者を受け入れること						○		○	○	
⑪: 見極める・あきらめる	海での自然体験を通して洞察力や判断力が養成されること								○	○	
⑫: 主体性の獲得	自分の能力を見極めて自ら行う能力の向上	○		○	○			○			
⑬: リーダーシップの獲得	リーダー体験による成長	○		○	○			○		○	

関連が考察された箇所を○印で示した

【C4: 共感・受容】は、[LS8: 共感性][LS9: 情動への対処]が関連していると考えられる。「その人を受け入れる」「ありのままを認める」といったヴァリエーションに見られる<概念⑩: 他者や状況を受け入れる>は、[LS6: 対人関係スキル][LS8: 共感性][LS9: 情動への対処]に関連していると考えられる。また、「判断を誤らない」「退く勇気を持てる」のヴァリエーションに示されている<概念⑪: 見極める・あきらめる>は、[LS8: 共感性][LS9: 情動への対処]に関連していると考えられる。

【C5: 主体意識や新しい見方の獲得】は、[LS1: 意志決定][LS3: 創造的思考][LS4: 批判的思考][LS7: 自己意識]が関連していると考えられる。「自ら海に出る」「自分たちで計画を立てさせて、自分たちでやらせる」「自分で考えるということが大切」「自分で決めて身をもって体験する」といったヴァリエーションに見られる<概念⑫: 主体性の獲得>は、[LS1: 意志決定][LS3: 創造的思考][LS4: 批判的思考][LS7: 自己意識]が関連していると考えられる。「考え方方が変わる」「意識が高まる」「リーダーになってみて気づく」「船の舵取りをする」などのヴァリエーションにおいて表現される<概念⑬: リーダーシップの獲得>は、[LS1: 意志決定][LS3: 創造的思考][LS4: 批判的思考][LS7: 自己意識][LS9: 情動への対処]といった要素の獲得・向上に関連していると考えられる。

3. カテゴリー相互の関係とライフスキル獲得過程における示唆

本研究において生成された概念とカテゴリーをふま

えてライフスキル獲得過程を考察する。海での自然体験には、<概念①: 快感情><概念②: 要求と必要性><概念③: 心構えや準備>から構成される、海や水辺が持つ特性およびそれらへの人間の反応や対応が生じることを示した【C1: 水辺や海が持つ特性への反応・対応】が存在することが示された。

海での自然体験を行う過程においては、【C1: 水辺や海が持つ特性への反応・対応】を基盤とした<概念④: 必然的なコミュニケーション体験><概念⑤: 対応・対処する体験><概念⑥: 工夫・試行錯誤する体験><概念⑦: 挑戦する体験>などの諸体験が生じており、これらの意味を関連付けた【C2: 活動中に生じる状況へ対応する体験】によって参加者が刺激を得て、変容・成長し、ライフスキルを獲得することが考えられた。

その変容や成長は、<概念⑧: 自信や達成感の獲得><概念⑨: 自然を通した自己評価>から構成される【C3: 自己価値の発見】および<概念⑩: 他者や状況を受け入れる><概念⑪: 見極める・あきらめる>から構成される【C4: 共感・受容】、<概念⑫: 主体性の獲得><概念⑬: リーダーシップの獲得>から構成される【C5: 主体意識や新しい見方の獲得】としたストーリーラインを示すことが出来た(図1)。

これらのライフスキル獲得過程の中で注目すべき点は、「体験活動を長く続ければライフスキルが向上する」といったヴァリエーションに見られるように、長く続ける、反復するといった時間経過と経験の積み重ねが重要であると示唆されることである。経験内容から読

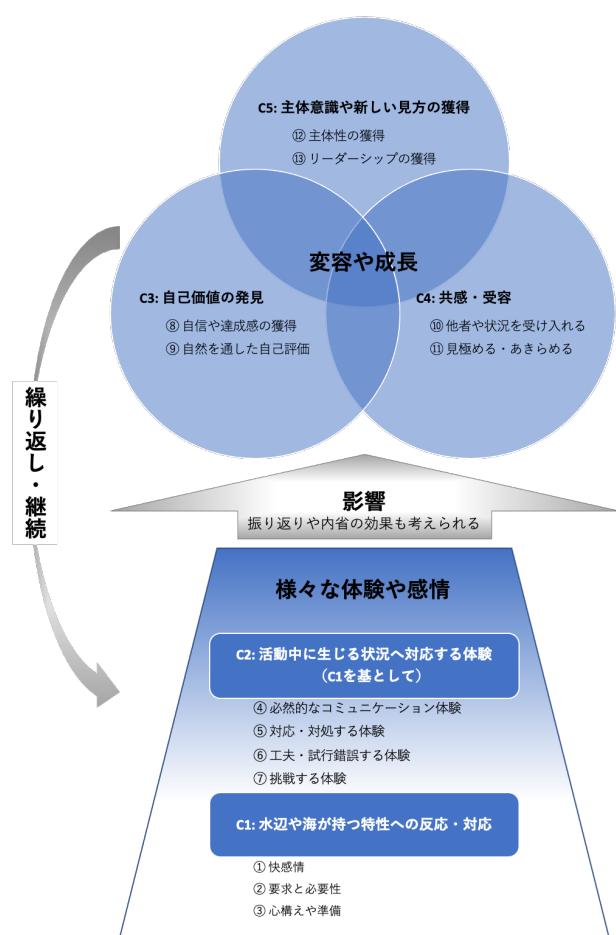


図1. 海での自然体験についての聞き取り調査から生成された概念・カテゴリーとそれらの関係

み取る必要がある能力では、自らの経験を振り返る経験が相対的に重要²⁰⁾と述べられていることや、研修を通じたライフスキル向上は、振り返りによって促進された可能性がある⁶⁾と述べられているように、反復や継続する過程で生じる内省や振り返りが重要であると推察することが出来る。振り返りについては本研究においても「陸に上がってから話をする」や「話し合って解決していく」「焚火をしてしゃべる」などの状況に関するヴァリエーションが認められている。一方で、「やめてしまう」や「対人関係が悪くなっていくこともあります」とのヴァリエーションや対比例も認められ、海での自然体験活動実施が必ずしもライフスキルの獲得に結び付いていない例があることが示されていることは、体験を通してライフスキルの獲得を目指す場合に、指導者の適切な介入や支援が必要であることを示している。また、本研究における<概念②：要求と必要性>の中では、海での活動に危険な要素が含まれていることが示されていることは、危機や転機にいかに対峙して取り組み、それらの経験をどのように意味づけるかが問われている²⁰⁾と述べられていることとも関連していると考えられる。海の自然体験における危険や危機に対峙して乗り越える経験について、参加者が意味づけを行う過程に内省や振り返りが位置づけられると示唆される。

加えて、「意識の高い人は問題解決に対する意識を持っていて」「参加者の活動への臨み方や意識によってもライフスキル獲得への影響は変わってくると思う」といったヴァリエーションにも認められるように、<概念⑫：主体性の獲得>がライフスキルの獲得にとって重要であると考えられる。さらには、「現場で責任を持って決める」「グループを導く」など、グループや他者に対して目標設定する、リスク管理する、情報収集する、予測・想像し選択・判断する、といったリーダーの立場に立つことによる<概念⑬：リーダーシップの獲得>によって、ライフスキル獲得へのより高い効果が得られることが示唆される。

IV. まとめ

本研究は、指導者の視点から、海での自然体験がライフスキル獲得に与える影響を探索的に明らかにするため、海での自然体験活動に関わるデータから概念を生成し、それら概念間の関係を考察することを目的として、指導者を対象とした質的調査を実施した。得られたデータからヴァリエーションを抽出し、それらを具体例とする13個の概念を生成した。また、概念間の関係から5つのカテゴリーの作成を行った。海での自然体験においては、【水辺や海が持つ特性への反応・対応】に含まれる感情、反応、対応が生じることが示された。また、【活動中に生じる状況へ対応する体験】から刺激を受け、【自己価値の発見】、【共感・受容】といった変容が生じるとともに、【主体意識や新しい見方の獲得】が示す成長につながるストーリーラインを示した。

本研究において生成された13個の概念<快感情><要求と必要性><心構えや準備><必然的なコミュニケーション体験><対応・対処する体験><工夫・試行錯誤する体験><挑戦する体験><自信や達成感の獲得><自然を通した自己評価><他者や状況を受け入れる><見極める・あきらめる><主体性の獲得><リーダーシップの獲得>と5つのカテゴリー【水辺や海が持つ特性への反応・対応】【活動中に生じる状況へ対応する体験】【自己価値の発見】【共感・受容】【主体意識や新しい見方の獲得】は、参加者のライフスキル獲得に關係していることが示唆された。

なお、本研究は、指導者の視点からみた海での自然体験がライフスキルの獲得に及ぼす影響を示した限定的な研究であるため、今後は、参加者からの聞き取り調査等を実施するなど、多面的に海での自然体験から得られるライフスキル獲得への影響について検討する必要がある。また、本研究では参加者の年齢層を特定せずに聞き取り調査を実施していることから、結果の解釈について慎重を要する。今後は、年齢層に着目した実証的な研究によって海での自然体験活動によるライフスキルの獲得・向上への影響を検証していく必要がある。

謝辞

本研究は JSPS 科研費（課題番号 15K01516）の助成を受けたものです。

引用文献

- WHO (編), 川畠徹朗他 (監訳) : WHO ライフスキル教育プログラム. 大修館書店, 東京, pp11-30, 1997.
- 上野耕平: 体育・スポーツ心理学におけるライフス

- キル研究の背景. 鳥取大学教育センター紀要, 5:175-188, 2008.
- 3) 島本浩平, 東海林祐子, 村上貴聰, 石井源信: アスリートに求められるライフスキルの評価—大学生アスリートを対象とした尺度開発. スポーツ心理学研究, 40(1):13-31, 2012.
- 4) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議: 青少年の野外教育の充実について(報告). p2, 1996.
- 5) 吉田章: 水辺活動への期待と導入のポイント. スポーツと健康, 32(7):10-13, 2000.
- 6) 太子のぞみ, 小原朋尚, 渕真輝, 藤本昌志, 原口啓太朗, 鈴木崇応: 長距離歩行とセーリングを用いた野外体験型新人社員研修プログラムが参加者のライフスキル獲得に及ぼす影響. 海洋人間学雑誌, 6(1):1-8, 2017.
- 7) 野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子: シーズンスポーツ「アウトドアクリエーション」受講者のライフスキルの獲得—ふりかえり記述による質的検討—. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 57(1):19-31, 2018.
- 8) 蓬郷尚代, 千足耕一: 海での自然体験・海での生活体験がライフスキル獲得プロセスに及ぼす影響—集中授業参加者を対象とした質的分析の事例研究—. 沿岸域学会誌, 33(1):27-34, 2020.
- 9) 橘直隆, 平野吉直, 関根章文: 長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響. 野外教育研究, 6(2):1-12, 2003.
- 10) 矢野正: 5泊6日間の臨海学校が児童の生きる力に及ぼす効果. 野外教育研究, 11(1):51-64, 2007.
- 11) 青木康太朗, 福田芳則, 谷健二, 下地隆, 小松由美: 水辺活動におけるウォーターウェイズプログラムが児童の生きる力に及ぼす効果. 野外教育研究, 8(2):13-22, 2005.
- 12) 諫山邦子, 奥山冽, 加藤敏之, 森敏隆: 釧路市の野外教育プログラムの参加者の自己概念の変容. 野外教育研究, 1(2):13-23, 1998.
- 13) 布野泰志, 中本浩揮, 幾留沙智, 中村夏実, 榎樂洋光, 森司朗: 長期的なヨット活動における小中学生の心理的変容および行動変容について—ジュニアヨットクラブに着目して—. 野外教育研究, 20(2):1-18, 2017.
- 14) 山川晃: 自然体験活動が参加者の「生きる力」に与える影響—メタ分析による検討—. 野外教育研究, 22(2):17-30, 2019.
- 15) Guest G, Bunce A, Johnson L: How Many Interviews Are Enough?: An Experiment with Data Saturation and Variability. Field Methods, 18:59-82, 2006.
- 16) 小田梓, 坂本昭裕: 不登校児は長期冒険キャンプ後どのように社会へ適応していくのか. 野外教育研究, 13(1):29-42, 2009.
- 17) 松本秀夫, 千足耕一: 海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度に与えた影響: スクーバダイバーを対象とした質的分析. 野外教育研究, 22(1):19-36, 2018.
- 18) 遠藤大哉, 青柳健隆, 岡浩一郎: 保護者の視点からみた長期継続型野外教育プログラムにおける参加者の自己成長プロセス. 野外教育研究, 21(1):55-65, 2017.
- 19) 木下康仁: ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂, 東京, 2007.
- 20) 上野耕平: 運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得. 体育学研究, 52:49-60, 2007.

□ORIGINAL INVESTIGATION□

**A qualitative study on the effects of natural experiential activities at sea for acquiring life skills :
An exploratory study from an instructor's perspective.****CHIASHI Koichi¹, TOMAGO Hisayo¹, MATSUMOTO Hideo³.**¹ Tokyo university of Marine Science and Technology; ² Tokai University.*Jpn. J. Marit. Activity, 10(2):15-23, 2022.*

(Submitted : 22 April, 2020; accepted in final form: 10 August 2021)

【Abstract】

The objectives of the present study were to explore the effects of experiencing nature at sea on life skill acquisition, identify concepts that influence the acquisition of life skills, and reveal the relationship among these concepts from the instructor's viewpoint. Interviews were conducted with 13 instructors. Variations were extracted from the collected data. Using these variations as specific examples, 13 concepts were determined and five categories based on the relationships among the concepts were identified. A storyline was then developed based on the relationships among the categories. It was revealed that emotions, reactions, and responses that were included in "reactions and responses to the characteristics of waterfronts and the sea" occurred while experiencing nature at sea. The storyline revealed that "experiences in responding to situations that arise during the activity" were inspiring, bringing about transformations such as "discovering one's self-worth" and "empathy and acceptance", and leading to growth as indicated by the fact that "a sense of independence and new perspectives were acquired". It was suggested that the generated 13 concepts and five categories influenced the participants' acquisition of life skills.

Key Words: sea, natural experiential activities, life skills, instructors, qualitative study.

Corresponding author : CHIASHI Koichi, e-mail : chiashi@chiashi.jp

□研究資料□

国立公園指定によるスポーツ・レクリエーション活動参加への影響

—慶良間諸島国立公園におけるスルーバダイビングを例とした調査—

大下和茂¹, 小泉和史².¹ 岡山県立大学情報工学部人間情報工学科; ² 日本体育大学スポーツマネジメント学部

海洋人間学雑誌, 10(2):24-29, 2022.

(受付: 2021年5月6日; 最終稿受理: 2021年10月1日)

キーワード: 自然公園, スルーバダイビング, スノーケリング, 旅行者.

I. はじめに

余暇の動向や実態を調査している「レジャー白書」によると、2019年の余暇活動は国内旅行の参加者が最も多く、これは9年連続で最多の種目となっている¹⁾。しかし、2020年からの新型ウイルス感染症の流行は旅行産業にも影響し、観光白書では、状況が落ち着き次第、日本人の国内観光需要を喚起させることができ、「観光需要の回復の鍵」、「観光による再びの地方創生に向けた第一歩」と指摘している²⁾。そのため、今後の状況次第では、国内旅行が再注目されると見え、様々な観光資源が注目・活用されると予測される。観光需要を喚起させる観光資源の一つとして UNESCO (国際連合教育科学文化機関) の世界遺産リスト登録 (以下、単に「世界遺産登録」とする) 地の活用が挙げられ、その内部および近隣の市町村や旅行会社では、世界遺産を誇客および集客の重要なキーワードだと考えている³⁾。実際に、世界遺産登録による旅行者の変化は一様ではないが^{3,4)}、日本では、白神山地、屋久島、そして白川郷などで、世界遺産登録により知名度が向上し、旅行者が急増したと報告されている⁵⁾。

旅行は観光や保養などにとどまらず、旅行先でのスポーツ・レクリエーション活動への参加に繋がる場合もある。例えば、富士山では世界遺産登録の2014年における富士山五合目の旅行客は前年から約45%増加となり、富士登山者は過去最多水準になった⁶⁾。白神山地や屋久島などでも、世界遺産登録により登山客が増加したと報告されており⁷⁾、旅行先の地理的特徴によっては、旅行を通したスポーツ・レクリエーション活動への参加にも繋がる。すなわち、従来の観光地に世界遺産登録等の付加価値が加わることで観光需要の喚起に繋がり、その地の特徴によっては関連するレジャー産業の活性などにも寄与する可能性がある。しかし、世界遺産登録は世界遺産委員会での決定が必要であり、近年は審査が厳格化しているとも言われている⁴⁾。

一方、各国で指定可能な自然保護やその活用などの一制度として「国立公園」^{注1)}が挙げられる。本邦での

国立公園は、「生物多様性の保護」と「人々のレクリエーション利用」が基本目的と考えられている⁸⁾。国立公園が制定された初期は、古くから親しまれてきた各地の名所、旧跡、伝統的な探勝地や山岳など原始性の高い自然の大風景が国立公園として指定されていたが、その後、居住地に近接したレクリエーションに適した場所も指定されるようになった⁹⁾。そのため、国立公園にはスポーツ・レクリエーション活動を紹介するところも多く¹⁰⁾、例えば、十和田八幡平国立公園ではキャンプやスキーなど、吉野熊野国立公園ではスノーケリング、慶良間諸島国立公園ではダイビング、スノーケリング、シーカヤックなどの活動が紹介されている。国立公園についても旅行者等への影響が報告されている。例えば、屋久島では、昭和30年代まで一部の自然愛好家や研究者以外の一般旅行者は極めて少数であったが、1964年に国立公園指定を受けて以後、見学を主体にした一般旅行者や磯釣り客が増加したと報告されている¹¹⁾。しかし、国立公園は1987年の剣路湿原国立公園以降、2014年まで新たに指定されることがなかったため、近年の国立公園指定とスポーツ・レクリエーション活動参加との関係も明らかにする必要がある。

2016年度から日本の国立公園を世界水準の「ナショナルパーク」としてのブランド化を図ることを目標に「国立公園満喫プロジェクト」が実施され、国立公園の活性化が図られている¹²⁾。そして、2014年、慶良間諸島国立公園^{注2)}が27年ぶりに国立公園として指定された¹³⁾。国立公園は世界遺産に比べて認知度が低いと言う報告もある¹⁰⁾が、近年の新たに指定された国立公園において旅行者が増加したとの報告もあり^{12, 14, 15)}、国立公園指定により、現地でのスポーツ・レクリエーション活動に影響を及ぼす可能性も考えられる。もし、国立公園指定でも世界遺産登録と同様に旅行者増加だけでなく、現地でのスポーツ・レクリエーション活動参加にも繋がるとすれば、単なる観光需要の喚起に留まらず、指定地におけるレジャー産業の活性などにも寄与すると言える。2014年に新たに指定された慶良間諸島国立公園は「海の国立公園」とも言われており¹²⁾、ダイビング、スノーケリング、シーカヤックが活動として紹介されている。そこで本研究は、国立公園指定が観光需要喚起やレジャー産業活性に繋がる可能性を調べるために、

責任著者: 大下和茂

〒719-1197 岡山県総社市窪木 111

e-mail: oshita@ss.oka-pu.ac.jp

慶良間諸島国立公園指定が現地でのスクーバダイビングサービス利用に及ぼす影響を調査した。なお、本研究は2015年度と2020年度に調査を実施し、比較検討を予定していたが、新型ウイルス感染症流行が観光産業に影響を与え、調査自体も困難となつたことから、2015年度の結果のみを資料として報告する。

II. 調査方法

1. 調査対象

調査対象とした慶良間諸島地域は、沖縄県那覇市の西方約40kmに位置し、大小30余りの島々と数多くの岩礁からなる島しょ群である。自治体は渡嘉敷村と座間味村であり、主な有人島は、渡嘉敷島、座間味島、阿嘉島、および慶留間島である¹²⁾。このうち、座間味村は、沖縄県で初めてスクーバダイビングが導入されたと言われている¹⁶⁾。座間味村のうち、阿嘉島は座間味村公式WEBサイトの観光ガイドマップ¹⁷⁾に掲載されている店舗で（2015年10月1日現在）、スクーバダイビングサービスを提供するもの（以下、ダイビングショップ）が全18店舗、ダイビングショップ以外（飲食店・日用品店等）が5店舗と、ほとんどの店舗がダイビングショップであり、スクーバダイビングサービスの利用を目的とする来島者が多いと考えられる。そのため、本研究は阿嘉島の店舗を調査対象とした。阿嘉島のダイビングショップ全18店舗およびダイビングショップ以外（飲食店・日用品店等）5店舗を対象に、後述する質問項目を2015年11月に構造化面接調査法で調査した。なお、面接調査の期間に休業していた店舗や責任者が不在であった店舗については、2015年12月から2016年1月の間に電話調査法を実施した。

倫理的配慮として、調査は研究目的で使用し、それ以外の目的では使用されないことを各店舗へ事前に口頭で説明し、調査結果を公表する場合、店舗が特定できないよう配慮することも説明した。これらが承諾できる場合のみ調査を実施した。

2. 調査項目および分析方法

各店舗への調査は、店舗の営業年数を確認した後、以下の4項目を質問した。

【質問1】店舗利用客の変化について、「ここ数年のうち、特にこの3年（2012年～2015年）で利用客は変化しましたか？」の質問に対し、増えた・やや増えた・変化はない・やや減った・減った、の5件法で回答を得た。

【質問2】利用客変化の要因について、「利用客の変化に慶良間諸島国立公園指定の影響はあると思いますか？それ以外に考えられる要因もあれば回答ください」の質問に対し、国立公園指定の影響については、ある・ややある・ややない・ない・分からないと回答して、国立公園指定以外の影響については具体的な要因の回答を得た。

【質問3】ダイビングショップに対して、利用客が増えたもしくはやや増えたと回答した店舗には、どのようなサービスの利用が変化したかを調べるために、「国立公園指定で利用客に変化があったものを全て選んでください」に対し、体験ダイビング・ファンダイビング・講習（認定カード取得）・スノーケリング・他の5件法で回答を得た。

【質問4】国立公園指定に関する意見について、「国立

公園指定について、良かった点、悪かった点、その他の意見があれば教えて下さい」に対し回答を得た。

以上4つの質問項目の回答について単純集計を実施した。また、国立公園指定による利用客の変化（質問1）と国立公園指定の影響（質問2）についての回答店舗の分類にはクロス集計を実施した。なお、ダイビングショップ以外の店舗については、質問1および質問2のみ調査した。

III. 結果

調査対象とした18店舗のダイビングショップのうち、12店舗より回答が得られた。営業年数は、10年以下が3店舗、11～20年が3店舗、21～30年が3店舗、そして31年以上が3店舗であった。

各質問項目の集計結果を表1に示す。店舗の利用客

表1. 阿嘉島のダイビングショップにおける2012(平成24)から2015(平成27)年にかけての利用客の変化に関する集計結果

【質問1】ここ数年のうち、特にこの3年（2012(平成24)～2015(平成27)年）で利用客は変化しましたか？				
増えた	やや増えた	変化なし	やや減った	減った
2(16.7%)	4(33.3%)	3(25.0%)	2(16.7%)	1(8.3%)

【質問2】利用客の変化に慶良間諸島国立公園指定の影響はあると思いますか？それ以外に考えられる要因もあれば回答ください				
ある	ややある	ややない	ない	分からない
4(33.3%)	1(8.3%)	0(0.0%)	5(41.7%)	2(16.7%)

【質問3】国立公園指定で利用客に変化があったものを全て選んでください（利用客が増えたもしくはやや増えた6店舗のみ）				
講習（認定カード取得）	スノーケリング	その他		
5(83.3%)	2(33.3%)	0(0.0%)	4(66.7%)	0(0.0%)

値は店舗数（百分率）

について、（質問1）「ここ数年のうち、この3年で利用客は変化しましたか？」の質問に対し、2店舗（16.7%）が増えた、4店舗（33.3%）がやや増えた、3店舗（25.0%）が変化はない、2店舗（16.7%）がやや減った、1店舗（8.3%）が減ったと、それぞれ回答した。店舗の利用客変化と国立公園指定の影響についての集計結果を表2に示す。変化の要因について、（質問2）「利用客の変化

表2. 阿嘉島のダイビングショップにおける2012(平成24)から2015(平成27)年にかけての利用客の変化と国立公園指定による影響

	合計	【質問2】国立公園化の影響		
		ある（ある・ややある）	ない（ない・ややない）	分からない
合計	12	5	5	2
利用（増えた・やや増えた）	6	5(83.3%)	0(0.0%)	1(1.7%)
質問の変化なし	3	0(0.0%)	3(100.0%)	0(0.0%)
減少（減った・やや減った）	3	0(0.0%)	2(66.7%)	1(33.3%)

値は店舗数（百分率）

に慶良間諸島国立公園指定の影響はあると思いますか？」の質問に対し、利用客が増えた、もしくはやや増えたと回答した6店舗のうち5店舗（83.3%）が影響はある、もしくはややある、1店舗（1.7%）が分からないと回答した。利用客に変化のなかった3店舗のうち、全店舗で国立公園指定の影響はなかったと回答した。利用客が減った、もしくはやや減ったと回答した3店舗のうち、国立公園指定の影響は2店舗（66.7%）でない、

1 店舗 (33.3%) で分からないと回答した。各質問項目の回答を表 3 に示す。国立公園指定の影響がなかった回答の詳細

【質問2】利用客変化の理由		【質問3】変化したサービスの種類	
国立公園化の影響	その他の影響	種類	備考
【質問1】利用客の変化で「増えた」と回答した店舗			
ある		体験ダイビング、スノーケリング	
ややある		体験ダイビング、スノーケリング	1回のみの利用客が増加 ファンダイビングは変化なし
【質問1】利用客の変化で「やや増えた」と回答した店舗			
ある	店舗の知名度向上	スノーケリング 体験ダイビングや ファンダイビングも微増	ほぼ1回のみの利用客だが、 その客の口コミで増加
ある		体験ダイビング、 ファンダイビング	
分からぬ	分からぬ		
ある	外国人観光客增加	体験ダイビング、 スノーケリング	講習(Cカード取得)は減少
【質問1】利用客の変化で「どちらでもない」と回答した店舗			
なし (観光客は増加)		積極的に 集客していない	
【質問1】利用客の変化で「やや減った」と回答した店舗			
なし (観光客は増加)		常連の高齢化、 結婚・出産 常連が宿や船を利用できない	
なし (観光客・外国人は増加)			
【質問1】利用客の変化で「減った」と回答した店舗			
分からぬ	意図的に受入を減らしている		

と回答した 5 店舗の全てで、観光客については増加と回答した。国立公園指定以外の影響について、利用客が増えた店舗では、店舗の知名度があがったこと（比較的、営業年数の浅い店舗の回答）や外国人旅行者が増えたとの回答があった。利用客に変化のなかった、もしくは減った店舗では、積極的に集客していない、意図的に減らしているなどと回答した。また、宿泊施設や交通手段の確保ができず、これまでの利用客が利用できなくなったとの回答もあった。利用客が増えた、もしくはやや増えたと回答した 6 店舗のうち、変化したサービスについて、5 店舗 (83.3%) で体験ダイビング、4 店舗 (66.7%) でスノーケリング、2 店舗 (33.3%) でファンダイビングと回答した（表 1）。その他の意見として、全体の利用客は増えたが講習（認定カード取得）は減少したとの回答もあった（表 3）。

国立公園指定に対する意見の集約を表 4 に示す。良かった点として、「来島者の増加」や「島の知名度の向上」の回答が最も多く、「財政面が良くなつた」や「環境対策の意識向上」などの回答もあったが、「良かった点はない」と回答する店舗もあった。悪かった点としては、「宿泊施設や交通手段の確保ができず、これまでの利用客が利用できなくなつた」、「ゴミやマナーなどモラル問題の悪化」や「一般海水浴客の増加（店舗を利用しないため、注意が促せない）」の回答が最も多く、その他の回答も含めると、交通手段やトイレ等の設備面、スノーケリングや海水浴客の増加による珊瑚等環境への影響に関する回答が多かった。その他の意見としては、行政サービスの改善が挙げられ、日帰り旅行者に対する危惧の回答もあった。

国立公園指定によるスクーバダイビングサービスへの影響・大下ら

表 4. 阿嘉島のダイビングショップにおける国立公園指定に関する意見の集計結果

回答内容の分類	回答店舗数	【質問1】利用客の変化		
		増えた店舗	減った店舗	変化のない店舗
来島者の増加	4	3	1	0
知名度の向上	4	2	1	1
良店舗にはない、もしくは、あまりない	2	0	1	1
か島の財政面	1	0	0	1
つ環境への対策でダイビングポイントは改善している点（オニヒトデの減少等）	1	1	0	0
環境保護に対する意識向上	1	0	0	1
意識の高いダイバーの増加	1	1	0	0
常連客への影響（宿もしくは交通手段の確保）	4	2	1	1
モラル問題（ゴミ、マナー）	4	2	2	0
一般海水浴客の増加	4	2	1	1
悪（店舗を利用しないため、環境等への注意が促せない）	2	1	1	0
か浅瀬の珊瑚破壊（ダイビングポイントに影響はない）	1	0	1	0
つ島民の移動（交通手段が確保できず、本島へ渡れない）	1	1	0	0
たトイレ不足	1	1	0	0
点日帰りのため、あまり島で浪費しない	1	1	0	0
田舎が減ってきた	1	0	0	1
ない	1	0	1	0
そ行政サービスの対応改善	2	2	0	0
の他	1	0	1	0

値は店舗数

表 5. 阿嘉島のダイビングショップ以外の店舗における 2012(平成 24)から 2015(平成 27)年にかけての利用客の変化に関する回答の詳細

【質問1】利用客の変化	【質問2】利用客変化の理由		店舗の種類
	国立公園化の影響	その他の影響	
やや増えた	分からぬ	特に若い世代で客の雰囲気が良くなった	飲食店
増えた	ある		日用品店
やや増えた	ややある	環境に優しいスポーツとしての認知度が向上している	シーカヤックショップ

調査対象としたダイビングショップ以外の 5 店舗のうち、3 店舗（営業年数は 15~25 年）より回答が得られた。回答の集約を表 5 に示す。店舗の利用客について、（質問 1）「ここ数年のうち、この 3 年で利用客は変化しましたか？」の質問に対し、1 店舗が増えた、2 店舗がやや増えたと、それぞれ回答した。変化の要因について、（質問 2）「利用客の変化に慶良間諸島国立公園指定の影響はあると思いますか？それ以外に考えられる要因もあれば回答ください」の質問に対し、1 店舗が影響はある、1 店舗がややある、1 店舗が分からぬと回答した。国立公園指定以外の影響について、利用客の雰囲気が良くなつたやシーカヤックショップでは、スポーツ 자체の認知度向上の回答があった。

以上から、座間味村・阿嘉島のダイビングショップでは、(1) 半数の店舗で国立公園指定により利用客が増加し、ほとんどの店舗で国立公園指定の影響があつたこと、(2) 主に、体験ダイビングやスノーケリングの利用客が増加したこと、(3) 利用客に変化がなかつた、もしくは減った店舗でも、観光客は増加と回答したこと、そして (4) 国立公園指定により来島者の増加や知名度の向上などの利点がもたらされたが、宿泊施設や交通手段が不足していることやモラルおよび環境への問題が懸念されていることを、それぞれ示した。

IV. 考察

本研究は、海の国立公園とも呼ばれる¹²⁾ 慶良間諸島国立公園において、国立公園指定が現地におけるスクーバダイビングサービスの利用に及ぼす影響について

現地調査を実施した。対象としたダイビングショップでは、12店舗中11店舗で店舗利用客もしくは観光客が増加したと回答し、10店舗で国立公園指定の影響があったと回答した。ダイビングショップ以外の店舗でも対象とした3店舗全てで利用客の増加を回答しており、うち2店舗は国立公園指定の影響を回答した。慶良間諸島国立公園満喫プロジェクト地域協議会の報告でも、慶良間諸島国立公園の利用者数は国立公園に指定された2013年度以降で増加傾向にあるとされている^{12, 18)}。座間味村利用者数は、2012年度で年間70,520人であったのに対し、2015年度で101,213人¹²⁾と3万人以上増加している。また、2017年度の利用者は107,739人¹⁸⁾、慶良間諸島国立公園全体では過去10年間で最大の約25.2万人と報告されている¹⁸⁾。ただし、これは国内だけでなく外国人旅行客増加も影響している。渡嘉敷村や座間味村では、2015年度以前の外国人入り込み客数のデータはないとしているが、住民の印象では外国人旅行客が増加傾向にあると報告されている¹²⁾。本調査においても、外国人旅行者の増加を回答する店舗があった。しかし、座間味村における2015年度の外国人利用者数は15,481人（全体の約15%）であり¹²⁾、先述の利用者数の増加と比較して、国立公園指定で増加した利用客の半数以上は国内からと考えられる。ただし、渡嘉敷村の報告¹⁹⁾によると、旅行者は2008年のリーマン・ブラザーズ破たん以降、減少傾向にあったが、2011年年の東日本大震災を契機に地震の少ない沖縄が選ばれるようになったことを背景に増加に転じたことも指摘しており¹⁹⁾、経済状況や災害なども少なからず旅行者増減に影響すると見える。しかし、慶良間諸島の国立公園指定による旅行者増加は他の報告でも示されており^{14, 15)}、これらの結果は店舗利用客もしくは旅行者増加に国立公園指定の影響が大きかったことを示している。

対象としたダイビングショップのうち、半数の店舗は国立公園指定で利用客が増加しており、このうち、ほとんどの店舗で国立公園指定の影響があったと回答した。また、増加したサービスの種類として、ほとんどの店舗が体験ダイビングやスノーケリングを回答した。そのため、旅行とともに参加するスポーツ活動として、比較的簡易に楽しめる種目が好まれると言える。今回調査対象としたスノーケリングやスクーバダイビングは、2019年の余暇活動において、参加人口はスポーツ全28項目の23位と下位に位置する一方、潜在需要については全28項目のうち2位と報告されている¹¹⁾。すなわち、実施したことはないが、経験してみたい活動の一つと言える。そのため、国立公園指定による付加価値で旅行先としての選定順位が上がり、その公園を訪れることで、潜在需要のあるスポーツ種目については、その参加に繋がるかもしれない。ただし、先述のように、外国人旅行客の増加により、これらの活動参加が増加したこととも考えられる。この点について、本研究では調査できていないが、外国旅行客の慶良間諸島国立公園利用形態として、東アジアからの利用者は日帰りが多く、欧米系の利用者は中長期滞在で、ビーチでの海水浴や日光浴、島内の散歩などを楽しむことが多いとされ、スクーバダイビングなどのガイドを伴うものは比較的小ないとされている¹²⁾。そのため、国立公園指定によるダイビングショップの利用客増加は、外国人旅行客の

影響も少なからず考えられるが、多くは国内からの利用客増加によると考えられる。これらの結果は、これまでの世界遺産登録に関する報告^{6, 7)}と同様に、国立公園指定によっても地理的条件によっては、その環境を活かしたスポーツ・レクリエーション活動参加者の増加に繋がることを、スクーバダイビングサービスの視点から示している。

本研究では国立公園指定により利用客が増加したとする店舗が多かった一方、宿泊や交通手段確保の問題で利用客が減った店舗もあり、国立公園指定以前から訪れていた利用者への影響を指摘する店舗が多かった。慶良間諸島国立公園へは、ほとんどの利用者が海路を利用する¹²⁾。那覇（泊港）から今回対象とした座間味村への移動は、1日1便のフェリーと1日2便（夏季は3便）の高速船となり（調査時点と比べ現在はフェリーの定員が増加されている）、夏季の利用者数は飽和状態だと言われている¹²⁾。今回の調査では島の住民の移動にも影響しているとの回答もあり、対策の重要性は高いと考えられる。しかし、主要な施設の適正な利用収容力に関するデータが整理されてないとの指摘もあり¹²⁾、本調査でも得られたように、環境整備や行政サービスの改善が求められる。また、本調査では、環境への問題が否定的な意見として多く挙げられた。渡嘉敷島および座間味村の両協議会では「慶良間地域エコツーリズムガイドライン」を策定しており、一般利用者や事業者向けのルールが記載されている¹³⁾。さらに、地域主体の海域利用に関するルール作りの検討が進められているほか、ダイビング事業者による自主的な活動も実施されている¹³⁾。そのため、国立公園指定により環境対策が促進されたとの意見もあり、浅瀬の海域に対してダイビングポイントでは、利用客増加の影響がないとの回答もあった。しかし、ダイビングショップなどの店舗を利用しない場合、注意が促せず、海水浴地域などの浅瀬では状況が悪化しているとの意見が多く挙げられた。さらに、世界遺産登録の場合と同様に²⁰⁾、ゴミのポイ捨て、トイレ不足、植物の踏み荒らし、生物の移動採取など、マナーやモラルの問題も多く回答された。世界遺産においては、「世界遺産教育」として、学校や生涯教育等で、市民の意識に働きかける試みが実施されている^{20, 21)}。国立公園においても各自治体によるガイドラインの制定・普及とともに、教育活動を通して問題解決に取り組むなど、マナーやモラルには多方面からの対策が必要と言える。

本研究は、国立公園指定が観光需要喚起やレジャー産業活性に繋がる可能性を調べるために、慶良間諸島国立公園指定が現地でのスクーバダイビングサービス利用に及ぼす影響を調査した。今回は店舗を対象とした調査に留まるため、店舗を通さない海水浴客などの実態は把握できていない。そのため、今後は、来島者のどの程度がどのような活動へ参加したかなど、より詳細な実態調査が必要である。また、本研究は、慶良間諸島国立公園のうち阿嘉島と言う限られた島で、主にスクーバダイビングのみの調査であった。レジャーダイビング認定カード普及協議会が集計したエントリーレベル（プロレベル資格者の監督なしで、バディ同士でダイビングができる資格の最低ランク）認定カード発行数前年比は、2010年～2019年の各年で87～105%の範囲で推移し²²⁾、大幅な増加や減少は認められていない。

そのため、全国規模で見れば、一箇所の国立公園指定によるスケーバダイビング利用の影響は小さいかもしれない。国立公園の指定がレジャー産業全体の活性に与える影響へ言及するには、他の地域で、他の活動も対象とした、より大規模な調査が必要と言える。このように、本研究は限られた調査であったものの、国立公園指定は旅行客増加とスケーバダイビングサービス利用の増加に繋がることを示した。また、これは外国人旅行客の影響もあるが、多くは国内からの利用客である可能性を示した。新型ウイルス感染症流行が落ち着き次第、日本人の国内観光需要を喚起させることが「観光需要の回復の鍵」、「観光による再びの地方創生に向けた第一歩」と指摘されている²⁾。今後の状況次第では、国内での様々な観光資源が注目・活用されると予測される中において、国立公園の活用が観光資源の一助になる可能性、観光だけでなくレジャー産業へ波及する可能性を、本研究結果は示していると言える。

V.まとめ

本研究は、海の国立公園とも呼ばれる¹²⁾ 慶良間諸島国立公園において、国立公園指定が現地でのスケーバダイビングサービスの利用に及ぼす影響について調査した。その結果、半数のダイビングショップは国立公園指定で利用客が増加し、そのほとんどで国立公園指定の影響があったことや、利用客が減った店舗でも旅行者は増加したと回答した。これらの結果は国立公園指定によって旅行者増加とともに、公園の地理的条件によつては、その環境を活かしたスポーツ・レクリエーション活動参加者の増加に繋がることを、スケーバダイビングサービスの視点から示唆している。国立公園指定により来島者の増加や知名度の向上などの利点がもたらされる一方、宿泊施設や交通手段が不足していることやモラルおよび環境への問題が懸念されていることも明らかとなり、インフラ整備やマナー、モラルへの対策が必要であることを示した。

「注」

- 1) 国立公園は、自然公園法において、「(第一条) 優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図ることにより、国民の保健、休養及び教化に資するとともに、生物の多様性の確保に寄与することを目的」とされており、環境省では、「次の世代も、私たちと同じ感動を味わい楽しむことができるよう、すぐれた自然を守り、後世に伝えていくところ」と紹介し、「国が指定し、保護し、管理する役割を担っている」としている⁹⁾。
- 2) 慶良間諸島の国立公園選定理由として、「陸と海が連続して一体となった雄大で実に多様な景観を有すること」が挙げられている¹³⁾。我が国の亜熱帯地域においては稀な多島海景観をはじめとする多様な海域景観を有し、切り立った断崖やサンゴを主体とした白い砂浜など、海から陸までの連続した多様な景観を有している¹²⁾。また、多様なサンゴを擁するサンゴ礁生態系、ザトウクジラの繁殖海域、ケラマブルーと称される透明度の高い海域が特徴となり「海の国立公園」とも言われている¹²⁾。

謝辞

本研究の実施にあたり協力いただいた対象者、座間味村・阿嘉島のダイビングショップおよびその他の店舗の皆様に深謝いたします。

引用文献

- 1) (公財)日本生産性本部: レジャー白書 2020. 生産性出版, 東京, 2020.
- 2) 国土交通省 観光庁: 令和2年版 観光白書. 日経印刷株式会社 (令和2年8月28日), 2020.
- 3) 渡辺悌二, 海津ゆりえ, 可知直毅, 寺崎竜雄, 野口健, 吉田正人: 観光の観点からみた世界自然遺産. 地球環境, 13:123-132, 2008.
- 4) 長谷川俊介: 世界遺産の普及啓発と教育. レファレンス, 60(5):5-27, 2010.
- 5) 森博隆, 吉越恆, 山本晴彦, 高山成, 岩谷潔, 原田陽子, 山北敦子, 山崎俊成, 立石欣也: 世界遺産「熊野参詣道」における異なる時間スケールに基づく観光客の動向と行動分析. 時間学研究, 4:7-16, 2011.
- 6) 鈴木晃志郎: ユネスコの追加勧告にみる富士山の世界文化遺産としての課題. 地学雑誌, 124:995-1014, 2015.
- 7) 徳田淳, 山口晴幸: 世界自然遺産「白神山地」の自然環境. 地球環境シンポジウム講演論文集, 12:69-78, 2014.
- 8) 親泊素子: 世界の国立公園の成立経緯について. 森林科学, 53:9-13, 2008.
- 9) 環境省: 日本の国立公園. <https://www.env.go.jp/park/>. (2021年2月1日閲覧)
- 10) 大下和茂, 小泉和史: レジャースポーツに興味を有する大学生の世界遺産登録地と比較した国立公園認定地の認識. スポーツ産業学研究, 29:191-198, 2019.
- 11) 関根久雄: 森への視線—屋久島における世界自然遺産と観光開発のゆくえ. 島嶼研究, 5:55-75, 2005.
- 12) 慶良間諸島国立公園満喫プロジェクト地域協議会: 慶良間諸島国立公園 ステップアッププログラム 2020. 環境省 沖縄奄美自然環境事務所, 2016.
- 13) 岸秀藏: 慶良間諸島国立公園について. みどりいし, 26:1-5, 2015.
- 14) 秋山綾, 折戸晴雄: 久米島における観光振興に関する住民の意識(1). 日本国際観光学会論文集, 22:7-12, 2015.
- 15) 座間味村商工会: 平成28年度 小規模事業者地域力活用新事業 全国展開支援事業 調査研究事業 事業報告書. 座間味村商工会 (平成29年2月), 2017.
- 16) 圓田浩二: 座間味村におけるスキューバ・ダイビングの歴史とその課題. 沖縄大学人文学部紀要, 9:33-42, 2006.
- 17) 座間味村: 座間味観光ガイドマップ, <http://www.vill.zamami.okinawa.jp/guidemap/>. (2015年10月1日閲覧)
- 18) 慶良間諸島国立公園満喫プロジェクト地域協議会: 慶良間諸島国立公園 ステップアッププログラム 2020 (改訂版). 環境省 沖縄奄美自然環境事務所, 2018.
- 19) 渡嘉敷村商工観光課 平成28年度 渡嘉敷村観光振興実施計画策定に向けた基礎調査業務 今後の渡嘉敷村観光振興の方向性について. (株)ライヴス (平成29年5月), 2017.
- 20) 古田陽久: 世界遺産の現状と課題. サイバー大学紀要, 1: 149-170, 2009.
- 21) 谷口尚之, 田渕五十生: 世界遺産教育における授業

モデルづくり-世界自然遺産・知床を事例として-. 奈良
教育大学紀要 人文・社会科学, 59:85-99, 2010.

22) Cカード協議会（レジャーダイビング認定カード普及協議会）：動向調査, <https://c-card.org>. (2021年8月1日閲覧)

編集後記

第10巻第2号におきましては、原著1本と研究資料1本の計2本をお届けさせていただきます。ご投稿をいただきました諸先生には、心より感謝申し上げます。なお昨年の9月にオンライン開催となりましたが、10回目の学会大会を開催する事ができました。講演および発表していただきました諸先生におきましても、重ねてお礼申し上げます。

さて、2021年においても新型コロナウイルス感染の終息は見通しがつかず、1年遅れた東京オリンピックでは、多くの種目において一般観客が入れない開催となりました。そんな中でも日本選手団は史上最多の金メダルを獲得する事ができました。このような結果の背景には、選手自身の努力や準備は勿論ではありますが、最新のスポーツ科学を駆使してサポートしてきたスタッフ・チームの貢献度も非常に大きいと考えます。このように学術研究の成果が、応用化、技術化を通じて、日常生活を支え、これを豊かにする役割を果たしていると確信できた大会でもありました。

本学会の目的の一つには、「海洋環境で活動を行う人達に対しての健康の維持増進、競技力向上、といった海洋とヒトに関わる学術の発展に寄与する」という事を掲げています。これらのことからも、海洋スポーツの研究の幅は広がり、本学会の役割も益々大きくなると確信しております。

次号の発刊におきましても、先生方の貴重なデータをお持ちでしたら是非投稿していただければ幸いです。

(植田 央)

日本海洋人間学会編集委員会

委員長／松本秀夫

副委員長／藤本浩一

編集委員／有田俊晃、植田 央、遠藤大哉、

佐藤淑子、遠矢英憲、中塚健太郎。

海洋人間学雑誌 第10巻第2号

2022年1月 発行

発行者 久門明人

発行所 日本海洋人間学会

〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学内

郵便振替 加入者名 日本海洋人間学会

口座番号 00150-6-429943

TEL/FAX : 03-5463-0638 (藤本研)

URL : <https://www.jsmta.jp/>

E-mail : jsmta@jsmta.jp

Vol.10 No.2

January 2022

Japanese Journal of Maritime Activity



Japan Society for Maritime Activity (JSMTA)